《正岡子規（36）の続き》その302

天涯茫々生

中村不折の続き

以下は、前号の不折筆子規像の説明である。

原図は、不折が『不折俳画』（明治43年出版、上下二巻のうち下巻に登載）を、最近、復本（ふくもと）一郎という人が、岩波書店から出版した『余は、交際を好む者なり』副題として「正岡子規と十人の俳士」と題した書物の口絵としたものの復写である。

まず『不折俳画』の大体を説明せねばならないだろう。この本は、河東碧梧桐の句に、虚子の評釈を加え、更に不折の図を添えて出版したもので、漱石の序文もある。従って子規と最も親しかった四名の合作ともいうべきものである。

書型は大本の縦長本で、縦27・9㎝、横16・3㎝というから、本医報をやや細長くしたくらいの大きさである。絵は彩色をほどこされているのだが、本医報では残念ながらモノクロームでしか紹介できない。

この図は、一見して子規と分る。しかし上部に書かれた碧梧桐の俳句は、子規を写したものかどうかは疑わしい。この作は、碧梧桐が新傾向皷吹のため全国を行脚の途中、青森県浅虫温泉で、明治40年2月に得られた句である。従って子規歿後四年有余後の作である。

虚子はこの頃、俳句から遠ざかって、小説を専らとしていたので、俳句の評釈も不折の懇嘱に負く事ができぬ為にするのだと云っている。子規の俳句世界から遠い「新傾向俳句」の評など好まなかったことが、この言で分る。

この図で、子規はずいぶん薄っぺらな敷布団を敷いているが、実景だったのであろうか。まだ病状がさほど進行していないので、仰臥ではなく腹這いになっている。読書をしているのか、好きな絵を描いているのか分らない。絵を描いているとすると、写生を旨とした子規の写生の対象物が枕頭にないし、絵具もなく、絵筆を持っていないようだ。筆洗らしいものもなく、左手で支えているものも画怙には見えない。やはり読書のようだ。

子規のいう灯炉がある。ホトトギス社から贈られた石油ストーブである。これが贈られたのは、明治32年12月で、翌年11月には伊藤左千夫から石炭ストーブが贈られたから、この画は明治32年から33年11月までのことである。

石油ストーブに要する石油は、不折の寄贈によるものであることは、子規の不折宛の礼状の書簡（明治32年12月25日発）で明らかである。

子規が絵心が湧き、色つきの画を描きたいとたわむれに云ったところ、不折が、使い残りの絵具を持ってきてくれたが、しばらくは放置してあったのを32年の秋になって体調もよかったので、枕頭の秋海棠を写生して、浅井、中村の両専門家に見せたところ非常にほめられたと「画」という随筆に書いている。

足許の柱に蓑と笠がかけてある。

笠は明治24年、武蔵野を歩いたとき、買い求めたもので、句が書いてあったが消してしまった。

武蔵野のこがらししぬぎ旅行きし
　昔の笠を部屋に掛けたり

蓑はその前の年の春、房総の雨にそぼぬれた時のもので、捨てかねた旅のかたみである。

草枕旅路さぶしくふる雨に
　菫咲く野を行きし時の蓑

これは明治32年執筆の随筆「我室」に書かれていることだが、同年の「室内の什物」には、次の句がある。

蓑掛けし病の牀や日の永き
春雨のふるき小笠や霰の句

いずれもかっての徒歩旅行を回想しての句であろう。この蓑と笠は、他の画家の挿絵にもある。